

# 7 社会を映す鏡 エイズと精神病

その社会が人権をほんとうに大切にしているかどうかを見破るノウハウがあります。それは、その土地の「平均的な精神病院」を予告なしに突然訪ねて、保護室を見せてもらうという方法です。保護室というのは、精神的な混乱がひどくて、自殺したり他人を傷つけたりするおそれがある時期の患者さんを保護するための、外から鍵のかかる部屋です。玄関や院長室がまことに豪華なつくりなのに、この保護室は大昔の牢獄そっくり、そういう精神病院が日本には数えきれないほどあります。「精神病院の保護室に温かさがあふれていたら、その社会はほんとうに豊かである」——そんな「法則」を私はひそかにつくっていました。

50 七二年にスウェーデンの医療取材した時も、この方法を試みて、日本では想像もしなかった光景に出会いました。公園の中に精神病院と並んで母子保健センターや歯科診療所があったのです。人々の偏見をなくすために、厚生省がわざとそういう配置にしたのだそうです。「初めのうちは町の人たちも怖いと思ったようです。でも、ここへ来れば、それが偏見とわかります。それが伝わって、みんな安心して訪れるようになりました」と職員が話してくれました。保護室は日本のものとはまるでムードが違いました。配色のよいカーテン、花が飾られた安らげる空間。他の病室との違いは、窓が強化ガラスで、ベッドが床に固定されていることだけでした。

けれど、九三年にこの国を訪ねた時、私の「法則」が成り立たない時代がきたことを知りました。古都ルンドで、精神病院に案内してほしいと頼んだら、意外な答えが返ってきたのです。「精神病院はなくなりました。それ

でも、ご覧になりますか?」。訪ねてみると、「補助器具センター」と「博物館」の看板が出ていました(写真右)。博物館には、かつての精神病院が再現されていました。ベッドに革ひもでくくりつけられている等身大の人形(写真左上)のそばに、次のような説明がありました。

「かつてなら革ベルトで縛られた患者さんも、今は、街の中のアパートやグループホームで暮らしています。私はアツと声を上げてしまいました。「かつて」ではなく、「いま」、日本の病院でその人形と同じような人を何度も見たからです(写真右下)。先進諸国では病院が縮小され、かつての入院者は町で暮らしているというのに、日本ではこの二十一年間に精神病院のベッドが十万人も増えました。精神病は社会を映し出す鏡です。

もう一つの鏡が、エイズです。54ページの社説で、「今、エイズでもっとも苦しんでいるのは血友病の人たち」と書いてから一年ほどたった八九年五月、四国の赤瀬範保さん(当時52歳)が感染者として初めて名乗り出て、大阪地裁に訴訟を起こしました。

それがHIV訴訟の始まりでした。五千人の血友病患者のうち二千人が感染したと推定されるのに、訴訟を起こした原告はたった二人でした。

それには、訳がありました。当時、エイズはただただ恐れられており、担当医でさえ患者の体に触ろうとしない時代でした。感染しているというだけでも差別が待っています。その上、遺伝性の血友病だと知れば家族全体が窮地に立ちます。

